



教皇様の叢

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1996 発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

感謝と祈りを

ささげるために

（休日とは主の言葉に心をひそめる日）

（教皇さまが休暇を取って滞在された北イタリアの町での、お告げの祈りの時間のお話。）

（…）この土地で、美しい自然に接していると、心も身体も回復し、造られた世界にひそむメッセージに気づくことができそうです。

あわただしい日々の生活に没頭する私たちは、わずかも足を止め、一息ついて黙想し、祈るための時間を取り戻す必要があります。

創世の書を開くと、神は「七日目にはその働きを終えて休まれた。神は七日目を聖なる日として祝福された。全ての創造の

わざを終えて、神がその日に休まれたからである」（2・2・3）とあります。このように、休むことは霊的に有意義であり、宗教的価値を帯びているのがわかります。

聖書はもっぱら「休む」ための日を主が祝福されたことを伝え、人間はいくらかの時間をさいて周囲の物事から離れ、自身自身に戻って、神の似姿である自らの偉大さと尊厳への感覚を養う必要があることを訴えています。

従って、休日人間にふさわしくない単なる逃避に終わらせたいけません。人生を決定するような、大事な日であるべき

なのです。身体も心もすり減らしてしまう日々の繰り返しから抜け出し、人生と仕事の根源的な局面を取り戻す日です。休息の時、とりわけ休日に、仕事は人生の目的ではなく手段であることを悟り、祈りと感謝に心を開く自分を見つめる場として、沈黙を味わう機会を得られるでしょう。

そうすれば、自分自身と人々の人生を違う角度から見られるようになるのも当然です。せわしい日常にとらわれず、内面の世界に目をむけ、自然の世界と人々の内に神の痕跡を見出すことができます。このような経験によって、人は家族や周囲の世界を新たな目で見るようになりま

す。兄弟姉妹の皆さん、主が与えてくださるこの機会を大切に、主に感謝してください。そうすれば、様々な理由で適切な休養や休日を取ることができ

にいる人々のことを忘れることのないでしょう。彼ら一人ひとりを聖母に委ねます。聖母はいつでもすぐに、困っている兄弟たちのもとへ駆け付けてくださるでしょう。体験した出来事を心に収め、たえず黙想し、考えを深めてきた聖母は（ルカ2・

19参照）、それらの深い意味を理解することができたのです。聖母の模範に倣い、私たちも人生の価値をもっとはつきり理解し、注意深く主の言葉に聞き従い、困っている人々に心を開くことができますように。（九六・七・二二）

「聖母マリアと教会」シリーズ 6

沈黙の師 聖マリア

1 前回は、教会生活に占める聖母マリアの存在について見ました。今回は、マリアが自らの模範と取り次ぎを通して教会に伝えてくれる、霊的な富にスポットを当ててみたいと思います。

まず最初に、マリアの人となりに関するいくつかの重要な局面について手短かに考えてみましょう。それは全ての信者にとって、各自の召命を受け入れ、全うするための価値ある手引きとなるからです。

マリアは信仰の道を、私たちの先に立つて歩いていきます。天使のお告げを信じ、託身の秘義を迎え入れた最初の人でした。（「救い主の母」13番参照）マ

リアの信仰の旅路は、神の母となる前からすでに始まり、地上での生涯を通じて深まり、発展していきました。それは恐れを知らぬ信仰でした。お告げの場で、彼女は人間の目からは不可能と思える事柄を信じ、カナの婚宴ではイエズスを促して最初の奇跡をさせ、救い主の力を公に示させたのです。（ヨハネ2・1〜5参照）

マリアが教えてくれるのは、きびしくまた献身を要求する信仰の旅路です。いつの時代でも、どのような状況の時でも、要求されることも多く、勇気と不屈の忍耐を要する道です。つつましい隠れた生活

2

マリアは神の御旨に素直
でしたが、それは信仰に
よるものでした。神の言葉を信
じて、生涯に渡って受け入れ、
神の崇高なご計画に従い、自分
に対して求められることを全て
受け入れたのです。

われらの聖母は教会と共に
あって、キリスト信者が日々主
の言葉に耳を傾け、毎日のいろ
いろな出来事の中でその愛すべ
きご計画を理解し、実行するこ
とで神に協力するよう励まして
おられます。

3

マリアは、信者たちに未
来を全て神に委ねること
を教えました。マリア自身の経
験を見ると、希望をふくらませ
ていたのはつねに新しい理由か
らでした。お告げを受けて以
来、マリアは先祖たちが抱いて
きた処女の胎内に宿る神の御子
への期待に思いを巡らせまし
た。マリアの希望は、その後の
イエズスのナザレトでの隠れた
生活と公生活の間にさらに強い
ものとなりました。三日目によ
みがえるといふキリストの言葉
に大いなる信仰を抱いていたの
で、十字架の悲劇に直面した時
でさえ、動揺することはなかつ
たのです。マリアは救いのわざ
成就への希望を捨てず、聖金曜
日の暗闇のあとに復活の朝が来
るのを待ち続けました。

第二バチカン公会議を振り返る シリーズ7

恩寵の秘義、
特別な召し出し

「司祭の役務と生活」について



(三) 第二バチカン公
会議について考察を進
めていますが、本日は「司祭
の役務と生活」について考え
てみたいと思います。公会議
文書「司祭の役務と生活に関
する教令」は司祭がテーマで
す。司祭は福音の伝達者、
「司教職位の協力者」(教会
憲章28番)であり、説教と秘
跡によって神の民を養い、治
め、神の国の完成に向かって
賢明に民を導きます。このよ
うな使命は、特に今の世に
あっては決して易しいもので
はありません。公会議文書に

よれば、「最も重大でしかも日
増しに困難な役割」(司祭の役
務と生活に関する教令1番)で
あり、教会の刷新に必要で欠
くことのできない使命です。全く
の話、司祭のいない、司祭の奉
仕がないキリスト教共同体など
想像もできないではありません
か？



司祭の役務とは、「機
能」であるよりも前に、
恩寵の秘義です！神の民の一人
に向かって発せられた、特別な
召し出しの秘義なのです。その
人は、神の国のために生涯を捧
げ、叙階の秘跡を通じて「特別

な霊印をしるされ、司祭キリス
トの姿に似たものとなる」(同
2番)のです。

キリストとのこのような深い
結び付きは、信者の共通司祭職
とは段階においてのみならず本
質的に異なる職位的司祭職(教
会憲章10番参照)を理解するた
めの鍵となります。事実、司祭
は新しい方法で司祭キリストに
似たものとされ、「キリストの
からだ全体である教会を建設す
るために；かしらであるキリス
トの役務者となる」(司祭の役
務と生活に関する教令、12番)
のです。とりわけ聖体を祝うと
き、司祭は「キリストのペルソ
ナ」において振る舞います。キ
リストの名において司祭は父、
教師として任じられ、ふさわし
い権威を授けられています。と
は言え「司祭は皆と兄弟の間柄
である」(9番)ことを忘れて



祝された処女、永遠の大
司祭の御母よ、愛する息
子たち、全世界の司祭たちの傍
らにおいでください。困難に遭
う司祭たちをお助けください。
彼らが自らの使命にふさわしい
者となれますように。キリスト
教共同体が、司祭を真の牧者・
父と認め、祈りと協力とまこと
の愛によって彼らを支えること
ができますように。
(九五・十一・二六)

4

マリアの模範は、沈黙の
価値を身をもって教会に
示しました。聖母の沈黙は、言
葉が少なさだけではありま
せん。それは特に、みことばが
人となったという秘義と、地上
での生活の間に起こった出来事
をひたすら信仰の目で見つめ、
心に収めて思いめぐらせていた
ことにあります。
みことばを受け入れたこの沈

黙、キリストの秘義を黙想する
このような能力こそ、マリアが
信者たちに伝えてくれる力で
す。ありとあらゆる情報の飛び
交う騒がしいこの世にあってマ
リアの証言は、霊的な豊かな沈
黙を味わい、観想的な心を育む
ことを可能にします。

マリアは「謙遜な隠れた生
活」の尊さを証明しました。誰
もが自らの資質と可能性を常に

最大限に発揮することを願ひ、
時には要求もします。誰しも尊
敬や名譽には敏感です。福音書
にもしばしば描かれているよう
に、使徒たちは御国で最も重要
なポストにつくことを願ひ、誰
が一番偉いのかをめぐる互いに
口論していました。そこでイ
エズスは、謙遜と奉仕が必要で
あることを彼らに教えねばなり
ませんでした。(マテオ18・1

「神の朋友」(第二版)

ホセマリヤ・エスクリバー著 精道教育促進協会スタッフ訳
「これらの説教はキリストの教えとキリスト教的な生活についてのカテケーシスであり、神について話すと同時に神と語り合う言葉です。」(まえがきより)
基本的な自然徳とキリスト教徳の全貌を示す18の説教を収録。 定価一、六〇〇円 千三〇〇円 お申込み・お問い合わせは当協会まで。

5、20、20、28、マルコ9・33、37、10、35、45、ルカ9・46、48、22、24、27参照）一方マリアは、有利な地位や名誉など求めたことはありません。いつでも神の御旨を果たそうと努め、御父の救いの計画に従って生涯を過ごしたのです。

一見、取るに足らぬと思われる生活に心ふさぐ人々にも、それがキリストと兄弟姉妹たちへの愛のために捧げられるなら、いかに価値ある生活となるかをマリアは示してくれました。

5 さらにマリアは、清らかに満ちた生活の価値を証ししました。余すところなく主のためには捧げられたマリアの靈魂の美しさは、キリスト信者の賛美的です。キリスト教共同体にとってマリアは常に、愛情と優しさに満ちた理想の女性です。それはマリアが身も心も清らかに生きたからです。

現代文化のあるものは冷笑的で、純潔の価値を認めず、性というものから人格の尊厳や神の計画を取り去り、その価値をおとしめているように見受けられます。そんな中で今も処女マリアは、良心を照らし、主と人々へのよりすぐれた愛へと導く純潔の証人であり続けます。さらにまた、マリアはいつの

時代にもキリスト信者にとつて、人類の苦しみに深い「同情」を示してくださる御方です。それは単なる感情的な同情にとどまらず、具体的かつ効果的な助けとして、物的・精神的に悲惨な状況に遭う人々の前に差し出されるものなのです。

マリアの後に続く教会は、地球上の貧しい人、苦しむ人全てに対してマリアと同じ態度で臨むことを求められています。涙や悲しみ・困難の中にある全ての男女に向けられた、主の御母の母親らしい心づかいは、とりわけ新しい世紀を前にしたキリスト信者に向かい、現代のつ

ましやかな苦しむ人々を、超越しから生まれた新しい世界への約束と希望にあずからせるための、具体的で目に見える愛の行動を起こすよう励ましています。

6 人々がイエズスの母に抱く愛情と献身は、目に見える教会の垣根を越え、和解の感情を育てます。母であるマリアは、もちろん子供たち皆の一致を願っています。教会における聖母の存在は、初代教会にあつたような一致の心（使徒行録1・14参照）を保ち、善意の男女全ての間で常に一致と平和の道を探し続けるよう促してい

ます。御子への取り成しを続けるマリアは、全人類一致の恵みを願っています。愛の文明を築くため、分裂への傾き、敵意や復讐への誘惑、よこしまな暴力へのいざないを克服するために。

7 多くの聖画像に描かれている、あふれる恩寵と平和を示す御母の微笑みを求め、分かちたいものです。微笑みは聖母の心の平安を表わし、教会にも喜ばしい雰囲気を与えてくれます。「よろこびなさい」というお

告げの天使の挨拶（ルカ1・28）を受けたマリアは、預言者たちが「シオンの娘」に告げた（イザヤ12・6、ソフォニア3・14、15、ザカリア9・9参照）救いの喜びにあずかる最初の者となり、その喜びを後世の人々に伝えました。

「われらの喜びの源」であるマリアにより頼むキリストの民は、希望から生まれる喜び、たとえ人生の試練の最中であろうと生まれる喜びが送られてくることを知っています。聖母に身を委ねることは、終わりのない喜びへの道なのです。（九五・十一・一二）

イエズスと女性

教会シリーズ 37

1 教会の教えと精神に従って女性の尊厳と使命について語る時、まず福音に目を向けなければなりません。キリスト信者は福音をもとにしてあらゆるものを見、調べ、判断するからです。

前回は、啓示に見られる処女マリアの象徴的な姿を通して、女性の特質と役割について考えましたが、福音の中に、女性に

対するキリストのご意志を見出すことができます。キリストは敬意をもって、優しく女性について語り、女性を喜んで受け入れ、この世に神の御国を築く仕事に加わるよう求めておられたことが示されています。

2 まず、婦人たちが癒される多くの場面（「女性の尊厳と使命」13番）や、男女を問わず苦しむ人と出会ったとき

の優しさに満ちた心、救い主としての心が示された場面を思い出します。ナインのやもめに「泣くではない」（ルカ7・13）と言われ、死からよみがえった息子を母親のもとに返されました。この出来事は、受難と死にもあずかった母マリアに対するイエズスの気持ちがあるように思われます。ヤイロの死の間見せてくれます。ヤイロの死んだ娘に対してイエズスは優しく言われました。「娘よ、私は命じる。起きよ。」そして起こして後、「娘に食べ物を与えよと言われた。」（マルコ5・41、43）また、腰の曲がった女

をあわれに思い、癒されました。この時、サタンのこと言及して、その女にもたらされた霊的な救いを思い起こさせました。（ルカ13・10、17参照）

3 福音書その他の箇所にも、イエズスが女性の信仰を賛える場面があります。たとえば、出血症の女の場合には、「あなたの信仰があなたを救った」（マルコ5・34）と言われました。この女性は当時の律法で不浄とされ、人々から隔離されていたので、これはとて

女性も男性も、御国に入ることができる

不変の教え

も意味のある賞賛でした。イエズスは女性を社会的な抑圧からも解放されたのです。カナン（ルカ7・36〜50参照）の女はイエズスから認められました。「ああ女よ、あなたの信仰は深い。」（マテオ15・28）この言葉が、イスラエルには異邦人であった人に向かって言われたと考えれば、特別の意味があります。また、神殿の献金箱にわずかなお金を入れたやもめへの賞賛も思われます。

（ルカ21・1〜4参照）また、ペタニアのマリヤのもてなしへの賞賛も。（マテオ26・6〜13、マルコ14・3〜9、ヨハネ12・1〜8参照）そして主は、このマリヤの行動が後に世界中に知られるようになると言われました。

4 男性しか登場しないラビのミドラッシュ（安息日や祝日に会堂や学校でユダヤ教の師が語った説教や話のこと）とは違い、イエズスは女性の世界からも例やたとえをためらうことなく引用されました。イエズスは女性と男性の双方に言及されたのです。どちらかと言えば、女性について語ることが多かったとも言えるでしょう。女性が劣っているという考えを少しでも否定するためであったと思われまます。

にも御国に入ることをお許しになりました。そして、女性に門を開くことによって、子供にも御国への門を開くことを望まれました。「子供たちを私のところに来させよ。」（マルコ10・14）女性たちがイエズスの所へ子供たちを連れてくるのを妨げようとした弟子たちに対するお言葉でした。女性と、女性の子供への愛に同意されたのです。

使命を果たすに当たり、イエズスは多くの婦人たちを伴われました。彼女らはイエズスに同行し、イエズスと弟子たちを助けました（ルカ8・1〜3参照）が、これはユダヤの伝統にはないことでした。このように見ると、イエズスは当時の社会に広がっていた、女性を一段下に見るような偏見を超越していることをお示しになりました。教会は男女差別を否定していませんが、それは不正と傲慢に対する戦いに、欠くことのできない要素なのです。（「女性の尊厳と使命」13番参照）

5 また、罪人の女にもイエズスは優しさを示されたことを福音は伝えてあります。痛悔こそ求められましたが、過ちを犯したからといって厳しくされることはなかったのです。これは男性をも含む事柄だったので、なおさらそうだったと言えます。いくつかのとても意味深い出来事があります。ファリザイ人のシモン（ルカ7・36〜50参照）の家に行つた女は赦されただけでなく、その愛を養えられました。サマリアの女は新たな信仰の使者になりました。（ヨハネ4・7〜37参照）姦通の罪で捕えられていた女は再び罪を犯さないようにという福音書の多くの箇所に見取れるように、イエズスは女性を神の国に招き、ご自分の救いのわざに協力するよう求めたになりました。福音書と使徒行録に登場する女性たちはイエズスの招きに応え、使徒たちを支えて福音宣教に多大な貢献を果たしました。今も信仰を伝え、福音を証しする多くの修道女と女性信徒の皆さんに、敬意と感謝を捧げたいと思ひます。

で、なおさらそうだったと言えます。いくつかのとても意味深い出来事があります。ファリザイ人のシモン（ルカ7・36〜50参照）の家に行つた女は赦されただけでなく、その愛を養えられました。サマリアの女は新たな信仰の使者になりました。（ヨハネ4・7〜37参照）姦通の罪で捕えられていた女は再び罪を犯さないようにという福音書の多くの箇所に見取れるように、イエズスは女性を神の国に招き、ご自分の救いのわざに協力するよう求めたになりました。福音書と使徒行録に登場する女性たちはイエズスの招きに応え、使徒たちを支えて福音宣教に多大な貢献を果たしました。今も信仰を伝え、福音を証しする多くの修道女と女性信徒の皆さんに、敬意と感謝を捧げたいと思ひます。

お言葉で赦されました。（ヨハネ8・3〜11、「女性の尊厳と使命」14番参照）明らかに、イエズスは罪と悪を黙認したりはなさいません。しかし、だれが罪人であっても、なんと深く人間の弱さを理解し、精神的に苦しんでいる人、イエズスの内に救い主を求めている人に対して優しかったことでしょう。

6 全員がキリスト・イエズスに
おいて一つである
イエズスが、救いのわざに女性たちも加わるよう望まれたことを福音は証言しています。イエズスに従い、イエズスと弟子たちを援助することをお許しになっただけでなく、マルタに信仰の行ないを求められたように、一人ひとりの行ないもお求めになりました。（ヨハネ11・26〜27）イエズスの招きに答えて、マルタはラザロがよみがえる前に信仰を表明しました。また、復活の後、墓に急いだ信仰深い婦人たちとマグダラのマリヤに、弟子たちへのメッセージを伝える役目を任せられました。（マテオ28・8〜10、ヨハネ20・17〜18参照）

「このように女性はキリストの復活の最初の使者となりました。」（「カトリック教会のカテキズム」205）これらは、キリストが女性をも御国への奉仕に呼ぼうと望まれたことの明らかなるしです。

7 イエズスがこのようにしたのは、人類を一致させるためであったと神学的には説明されます。聖パウロが述べたように、自らいけにえとなることで全ての人を和睦させて「一つの体」にし、「新しい人」と

させることをお望みでした。（エフェソ2・15、16）「もう、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由民もなく、男も女もない。みなキリスト・イエズスにおいて一つだからである。」（ガラツィア3・28）

もし、イエズス・キリストが男と女を神の子として同等の地位で一つになさるのであれば、男女の違いを抑えることによつてではなく、不正な不平等を正し、教会の一致において全てを和睦させることによつて、双方に使命をお委ねになります。これが今回のお話の結論です。

8 初代キリスト教共同体の歴史は、福音宣教に果たした女性の偉大な貢献を示し、聖パウロが「ケンクレアの教会の女執事」と呼ぶ「姉妹フォイベ」から書き始めて次のように記しています。「彼女は多くの人を、特に私を助けた人である」（ローマ16・1〜2）と。ケンクレア、ローマ、全世界で、使徒たちを助けた多くの婦人たちに敬意を捧げます。また彼女らと共に、修道女、信徒を問わず全ての女性の方々を思い起こし、賛えます。この人々は家庭や社会においてキリスト教精神の育成に貢献し、信仰を伝え、福音を証してこられました。（九四・七・六）

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙。毎月十日発行。定価 一部百八十円（送料とも）
■一年予約 送料とも一〇五〇円から。詳しくは精道教育促進協会まで。

郵便振替
01130-
8-72393